

インド・ネパール佛蹟巡拝およびネパール教育支援の旅で感じた所感

森山 邦男



ブッダガヤの大菩提寺にて参加各位

釈迦が成道した金剛坐前で参拝する人々

夜の大菩提寺

ダライラマなども言っていますように仏教では創造主の存在は認めません。ですから本来的な釈迦仏教は偶像崇拜を説かないのです。お墓参りをすることなどを仏教と思っている人が多い事と思いますが、此れ等は別に宗教でもなんでもなくて日本古来の民族儀礼なんです。死んだ人にお経を読むことはあっても、生きているうちに真の仏教を知ろうとする人は本当に稀で残念な事です。

釈尊の教えの基本は『「縁起」の法』を説きます。釈尊は成道の地ブッダガヤでその悟りを得て天地の道理（縁起の法）を見極められました。その釈尊の覚られました縁起の教えは、パーリ語経典にはないと言われておりますが、漢訳文では、『三法印（さんぼういん）』と云う言葉で表現されております。『三法』とは「諸行無常」・「諸法無我」・「涅槃寂靜

の、仏教の基本となる考え方であり、『印』とは「仏の真理のさとの内容を称するもの」です。この仏教の基本教義の「三法印」は各日本仏教の宗旨が異なっても共通しておるものです。

1 『諸行無常』(しよぎょう・むじょう)

無常とは万物は常に刻々と変化している事実であり、仏教の信仰の原点です。移ろいゆくはかなさを情緒的に無情(むじょう)と嘆くだけでなく、無常だからこそ、真摯な自覚を持ち、光陰虚しくする事無く、この『今』を生きて生きることが大切であると、釈尊は説いております。

2 『諸法無我』(しよほう・むが)

この世に存在するものはすべて因縁(いんねん:[直接・間接])の関わり合いに因って存在している事実なのです。私たちは先祖を因とし、両親を縁として得難きこの世に生まれたのです。この関わり合いによって存在している事実を「縁起(えんぎ)」と言います。したがって私たちはこの地球上で、自然環境も含めて凡ての人やものと把手供行(はしゅきょうぎょう:共に手を取り合って行く)して共生してゆかねばならないと釈尊は説きます。

3 『涅槃寂靜』(ねはん・じゃくじょう)

無常であり、無我であるこの人生に対する今、此所(ここ)での私たちの心掛けを示された言葉です。『涅槃』とは究極の安らぎを意味し、元々の意味は「(火を)吹き消すこと」、詰り、私たちが煩惱として有している『貪(とん)[むさぼり]』、『瞋(じん)[いかり]』、『癡(ち)[おろかさ]』の三毒を吹き消すことが出来れば心と身体の安らかなさまを得て保てるという教えです。この「涅槃寂靜」に至る行を、密教系では「真言」、禅宗では「坐禅」、浄土系では「念仏」、法華系では「題目」等々ありますが、それは「涅槃寂靜」に至る道の切り口が異なるだけで究極の安らぎを得ることの目的は一緒であります。

これらに『一切皆苦』を加えて「四法印」となります。

4 『一切皆苦』

仏教では、人生は自分の思うようにはならないため多くの苦しみをともない、人生は苦である(一切皆苦)と云っています。その「苦」を分析したものが「四苦八苦」で、人生の根本的な苦しみの「[生](#)

- ・「[老](#)
- ・「[病](#)
- ・「[死](#)

の四苦に、「愛別離苦

- ・「怨憎会苦
- ・「求不得苦
- ・「五蘊盛苦

を加えて八苦とします。

「四苦八苦」とは、

人生の根本的な苦しみの、1. 「[生](#)

- 、2. 「[老](#)
- 、3. 「[病](#)
- 、4. 「[死](#)

の4つを四苦とし、

5. 『愛別離苦(あいべつりく)：愛する者と別れなければならない苦しみ』。
6. 『怨憎会苦(おんぞうえく)：怨み憎んでいる者と会わなければならない苦しみ及び天災・事故等の予想もしない災害に遭う苦しみ』。
7. 『求不得苦(ぐふとくく)：求めても得られない苦しみ』。
8. 『[五蘊盛苦](#)(ごうんじょうく)：あらゆる身体的・精神的な苦しみ』。

以上の四苦に加えて、合わせて『四苦八苦』といいます。

無常・無我・苦という真理を受容して涅槃に至るという道は、原始仏典から終始述べられており、これらの解決手段として、『十二因縁(じゅうにいんねん)』『四諦(したい)』『八正道(はっしょうどう)』『六波羅蜜(ろっぱらみつ)』等の具体的思考分析を仏教では致しております。

ですから釈尊の説いている「教え」は、神掛った創造主の存在や永遠不滅とする抽象的な絶対的真理といったようなものを説いてはおらず、「一日、一日を大事に生きる」という何処までも日常的な行動規範を説きます。



ダーメーク・ストゥーパ前の遺跡群

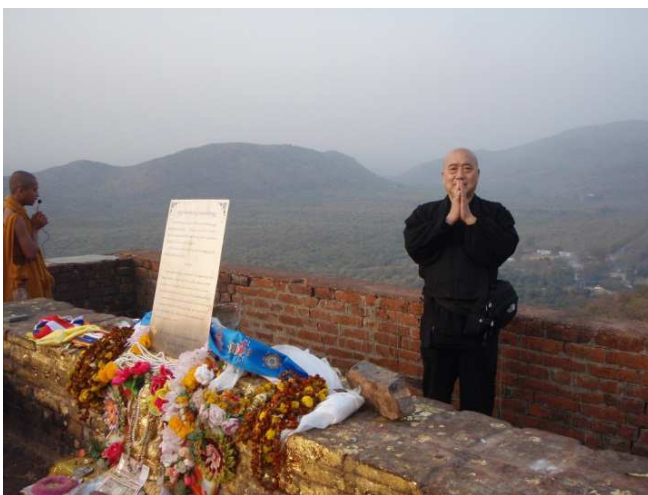


サルナート遺跡の説明を受けている会員各位

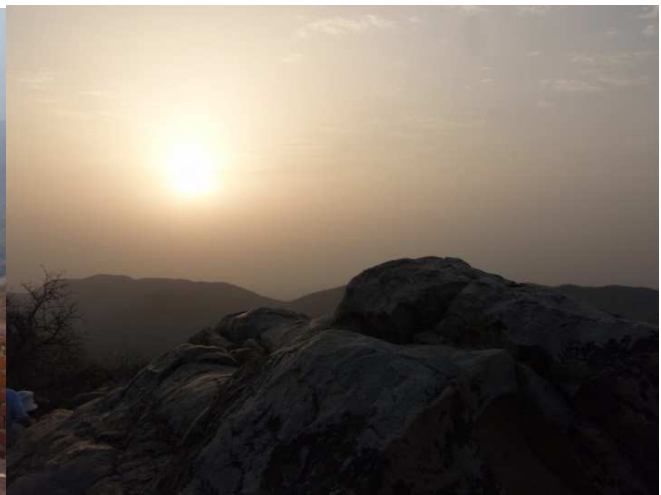
初転法輪（初説法）の地サルナートは釈尊がブッダガヤで悟りを得た後に、父王スッドーダナ（浄飯王：じょうぼんのう）がゴータマ・ブッダを守らせるためにつけた者だともいわれる五人の侍者が苦行の仲間として共に修行に励んだ。その過ぎて釈尊が苦行を捨てた時に釈尊を見限って去って行った5人に説法するために、このパーラーナシーの鹿野苑（ろくやおん）へ赴くのである。サルナートは仏陀（シャカ）が初めて、この去って行った侍者5人達に説法を行った初転法輪の地である。この地で5人の侍者が弟子となり、この5人と森の鹿達を相手に説法を行ったとされ、かつてここには鹿が多く生息していたために、この地は仏教徒から鹿野苑とも言われています。

最初の説法は「放逸」と「苦行」の両極端を脱し離れた**中道**、すなわち**八正道**（はっしょうどう）と**四諦**（したい）であったと言われております。これを「初転法輪

と名付けられ、また、釈尊の時代は戦いが多かったようで、戦争は執愛の極みによってなされると説いております。



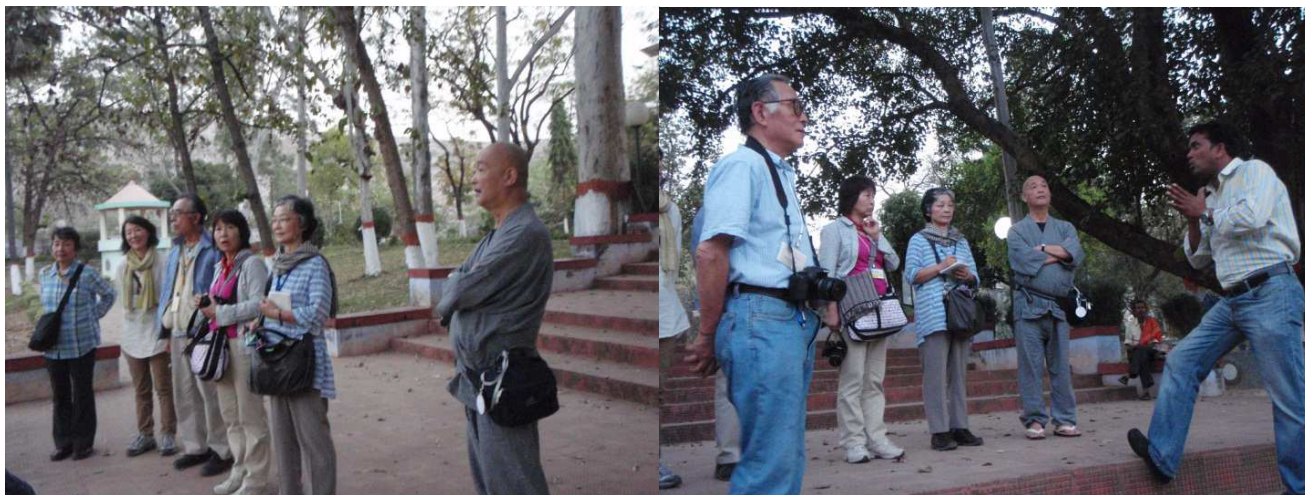
霊鷲山のレンガ造りの香室跡にて



霊鷲山山頂から日の出を望む

釈迦説法の地「霊鷲山：りょうじゅせん」は法華経を始め多くの経典を説いたと言われておりますが、釈尊は八十歳の時に死期を悟り、霊鷲山を降りて生まれ故郷の西へと向いました。そいで涅槃の地（終焉の地）「クシナガール（クシナガラ）」に到りました。生まれ故郷のルンビニに向う途中のこの地で鍛冶屋の**純陀**（チュンダ）が供養した豚肉料理、または茸料理を食して激しい腹痛と**下痢**を起こしたのが、釈尊が死んだ原因とされております。（三大聖人の死について、

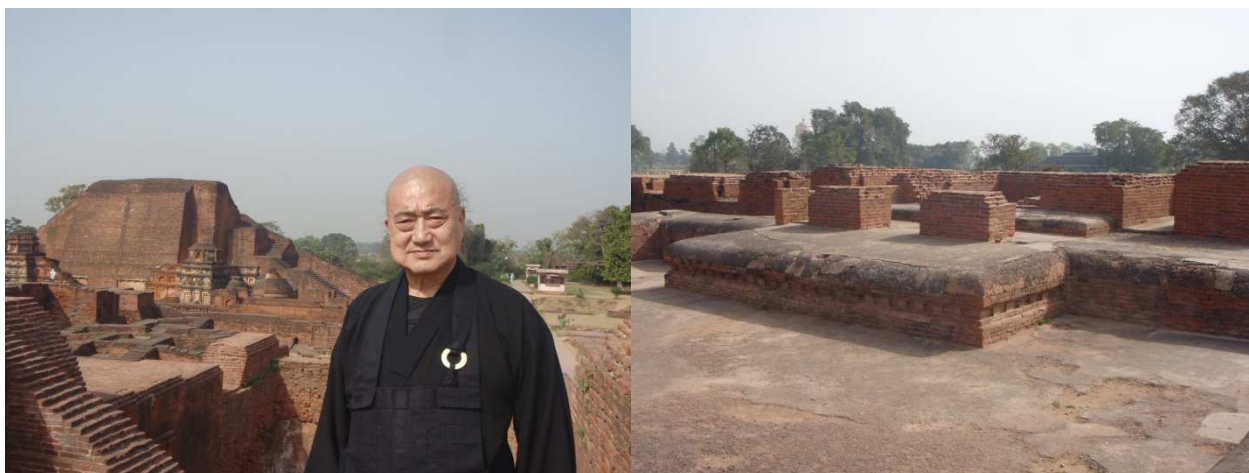
キリストは理不尽な「磔による刑死」、ソクラテスは『悪法も法である』と言って受けた「毒杯による刑死」、釈迦は自ら知り得ていた「中毒死」と、この死の有り方については実に考え深いものがあります)



竹林精舎にてガイドのカンさんの説明を受けているミカの会々員の各位

ラージギルの竹林精舎は、霊鷲山の麓の土地をカラダ長者が寄進し、ビンビサーラ王が伽藍をブツダに建立寄進した最初の僧院です。その名の通り過っては竹林に覆われていたようですが、現在は公園になっていて、僅かに竹林あるだけで、伽藍の痕跡もなく往時の面影はありませんでした。

『[ナーランダ大学\(大僧院\)](#)』は、『[インド・ビハール州](#)』中部にある、427年に建てられた世界最古の大学の1つです。「ナランダ」は『蓮のある場所』という意味で、蓮は知恵の象徴であるため、『知恵を与える場所』・『知恵を授ける場所』と解釈されております。



[ナーランダ大学](#)遺跡にて

『[ナーランダ大学](#)』が出来た経緯は、『ゴータマ・ブツダ』がこの地を訪れた際、『Pavarika』と呼ばれるマンゴーの木立の下で説法したと言われており、それ以来、この地に各地から多くの人々が集まる様になり、

仏教を学ぶ重要な場所となった。歴史上で最大の居住型の学校で、最多で1万人以上の学徒と、1,500人の教員が居たとされ、高い塀に囲まれて、9階建ての建物もあり、この中の図書館には500万冊を超える文献が保管され、多種多様な分野の学業が行われていました。

チベットの記録によりますと、インド仏僧『龍樹：ナガールジュナ』（生没年150～250年頃）が講義を行ったとされていますが、グプタ朝（427年成立）時代には大学が出来たと考えられています。又、645年（唐時代）に、『玄奘三蔵法師』が657部に及ぶ經典を中国に持ち帰った事でも有名です。

1193年に、『クトゥブッディーン・アイバク』（ムガル帝国のインド侵入以前にデリーを中心に北インドを支配したデリー・スルタン諸王朝最初のスルタン）に隷属した將軍『ムハンマド・ビン・バフティ・ハルジー』が率いるトルコ系イスラム人の侵略によって大学は破壊され、仏教に変わってイスラム教が入り込んで来た事により、この後のインド仏教は衰退してしまいました。

しかしこのことによって、インド仏教より派生した仏教は、

『チベット仏教』（ナーランダ後期（9－12世紀）から、チベット伝統から来ているといわれ モンゴル、中国北部に広まる）

『大乘仏教』（古代のナーランダ大学に起源を持ち、中国、ヴェトナム、韓国、日本に伝わる）

『上座部仏教』（ナーランダで興り、スリランカ及び東南アジアのミャンマー、タイ、カンボジアなどの地域に広がる）

と、仏教はインドから多くの国々に影響を与え、今日、世界各国にまで広まって存続しています。

此の度の、インドの仏蹟巡拝は毎日車での移動が主で誠に難渋で（悪路と渋滞の中、乗車時間は長い時には16時間にも及びました）埃と悪臭の中、疲労困憊致しましたがそんな中、インド大陸の平原の朝日・夕日の素敵さは又ひとしおでした。

釈尊の成道の地ブッダガヤ、初転法輪（初説法）の地サルナート、涅槃（入滅）の地クシナガラ、釈尊が29歳まで生活をしたカピラ城の巡拝の等々は初めてで、佛教者として感慨も深いものでした。



東日本大地震被害者慰霊法要随喜僧侶の方々 東日本大地震被害者慰霊法要の参加ルンビニ小学生

釈尊の誕生の地ネパールのルンビニでは今回の目的の一つである3月11日の「東日本大地震

被害者慰霊法要」を10ヶ国12団体の僧侶、1000人以上の小学生の参加を得まして無事に営むことが出来ました。ただまことに残念な事でしたが、子供たちに差し上げました飴ですが、子供たちが引揚げた後には一面にその飴を入れていた袋と包紙が散乱しており、我々メンバーで拾い集めました。このことは今後の教育支援の課題である事と思います。



木陰で授業している小学生

木陰で授業している小学生

床に直に座って授業を受けている

また、開校式、建設途中の数校と建設依頼を受けた学校予定地の視察と優秀な女子学生5名への奨学金授与式にも参加して来ました。それにしても、彼の地の貧しい所の小学校は教室が有っても床に直に座って学ぶ事が出来る事は良い方で、教室が無い所は木陰での授業で雨が降れば学ぶ事が出来ません。それでもまだ学校で学ぶ事が出来ますのは良い方で、学校が有っても学ぶ事が出来ない多くの子供たちがまだまだ多くいる現状でもありまし、ネパール政府は山岳地方、インドとの国境沿いでは余り手を入れておらず、学びたくてもその学校すらなく少ないようです。



優秀な成績で受賞された女子学生達と共に

講堂の椅子は半壊状態でした

講堂の視察を終えて

日本に於いて、6世紀末・7世紀初め、儒教の素養を備え、仏教的徳治主義を遂行して、現在の日本の繁栄と平和の礎を築いた聖徳太子(574~622年)を始め、玄奘三蔵法師(唐代の中国の**[訳経僧602~664年](#)**)がインドから持ち帰った經典により、また、鑑真(688~763年)や各祖師方により日本仏教は充実したものとなりました。

恩について、仏教ではさまざまな經典に説かれています。

「四恩」とは、①父母の恩 ②社会の恩 ③郷土の恩 ④仏の恩

『正法念処經』には、①母の恩②父の恩③如来の恩④説法法師の恩の四恩が説かれており、『大乘本生心地觀經』では、①父母の恩②衆生(社会)の恩③国王(国家)の恩③三宝(仏・法・僧)の恩の四恩を説いております。人の人たる道は恩を知り、恩に報いるべきとそれぞれの經典は「四恩」を説いております。また、道元禪師は『今の見仏聞法は仏祖面面の行持より来れ

る慈恩なり、仏祖若し単伝せずば奈何にして今日に至らん、一句の恩尚お報謝すべし、一法の恩尚お報謝すべし、況んや、正法眼蔵無上大法の大恩これを報謝せざらんや、・・・・・・正に仏恩を報ずるにてあらん。

と仰せられております。

現在の日本は、夜道でも明るく防犯も行き届いて一人歩くことが出来、大災害等の何事が有っても平穩、平和で、また、社会秩序が保たれて、衛生的で何処でも水道の水がそのまま生で飲める国は世界中探しても他に類がありません。これは偏に、仏祖の成道から賜つての因縁がある故にと思っております。

このことから、今後も、釈迦がお生まれになりましたまだまだ発展途上にあるネパールの国へのご恩返しとして、微力ながらネパールの教育支援に力を注いで行きたいと思っております。

また、末筆ながら、此の度の「インド・ネパール佛蹟巡拝および東日本大地震被害者慰霊法要ならびにネパール教育支援の旅」が大過なく円成されました事を、企画運営されました方々に感謝とお礼を申し上げます。誠に有難うございました。